

5

エヴェリーナ・ロンドン小児病院の設立について

柳澤 波香

津田塾大学

エヴェリーナ・ロンドン小児病院 (Evelina London Children's Hospital) は、2005年10月、ロンドンで二つめの小児病院として、テムズ河を臨むセント・トマス病院の隣地に開院した。ロンドン南部およびイングランド南東部の小児医療拠点病院として、21世紀に向けて開設されたこの病院は、19世紀後半、妻子を喪ったユダヤ系大富豪ロスチャイルドが創設し、後にガイ病院に編入されたエヴェリーナ小児病院 (Evelina Hospital for Sick Children) が再生したものである。

フェルディナンド・ド・ロスチャイルド (Ferdinand de Rothschild, 1839-1898) は、1865年に従妹エヴェリーナと結婚したが、翌年、懐妊中のエヴェリーナは鉄道事故に遭い、早産となった。ロスチャイルドの友人で女王の産科医・内科医を務めるファーレ (Arthur Farre, 1811-1887) が直ちに救命にあたったが、母子共に落命した。悲嘆にくれたロスチャイルドは妻と長男のメモリアルに産科病院の設立を考えたが、ファーレは貧困と不衛生のために病み苦しむロンドンの子どもの救済を訴え、ロスチャイルドもこれに同意した。

1869年、ロスチャイルドは貧困地域であったサザーク橋の近くに、妻の名を冠したエヴェリーナ小児病院を創設した。当時の英国の病院はヴォランティア病院であり、篤志家など一般市民の寄付金をもとに設立されたが、エヴェリーナ小児病院はロスチャイルド個人の財産のみで設立された。また、他の病院が既存の建物を改装し、病院に転用したのに対し、ロスチャイルドは地上4階、地下1階建の病院を新築した。採光と換気に配慮がなされ、プレイルーム、隔離病棟および乳児専用病棟を設置し、当時としては最先端の設備を備えていた。

病院理事および医師としてファーレは病院に長年にわたり深く関与したが、英国議会議員であり美術品収集家でもあったロスチャイルドの幅広い人脈を反映して、整形外科医ベーカー (William Marrant Baker, 1839-1896)、小児科医グッドハート (James Goodhart, 1845-1916)、内科医・医師伝記作家ヘイル＝ホワイト (William Hale-White, 1857-1949) など斯界に名を馳せた医師が診療にあたった。近隣のガイ病院に続き、ここではリスターの消毒法を他の病院に先駆けて導入したが、感染症が多く、重篤な状態で来院する小児患者が多数であったため、19世紀末に至るまで患者死亡率は高率であった。

第二次世界大戦後、1948年のNHS施行に伴い、病院はNHS傘下に入り、ガイ病院に合併された。1976年、建物の取り壊しにより、病院は閉鎖され、Evelina Children's Wardとしてガイ病院内の病棟に名を留めるのみとなった。

1980年代末から1990年代にかけて英国のNHSの医療は低迷を続けたが、政権交代をなした英国労働党は1999年、セント・トマス病院の看護師寮跡地に、ロンドンではグレート・オーモンド・ストリート小児病院の設立以来約一世紀半ぶりとなる小児病院の新築を決定した。総費用は6千万ポンドで、NHSと一般市民による寄付で1千万ポンドが賄われ、Guy's and St Thomas' Charityが5千万ポンドを拠出した。フェルディナンド・ド・ロスチャイルドは再婚せぬまま、自らが創設した小児病院に終生惜しめない援助を与え、多額の財産を同病院に遺した。その遺産はガイ病院を経て、Guy's and St Thomas' Charityへと受け継がれてきたため、エヴェリーナ小児病院は21世紀初めに蘇ることになったのである。新病院の名称は、この病院がロンドンを中心とするテムズ河南岸地域における小児救急医療および重要疾患の先端医療センターであることから、エヴェリーナ・ロンドン小児病院と定められた。